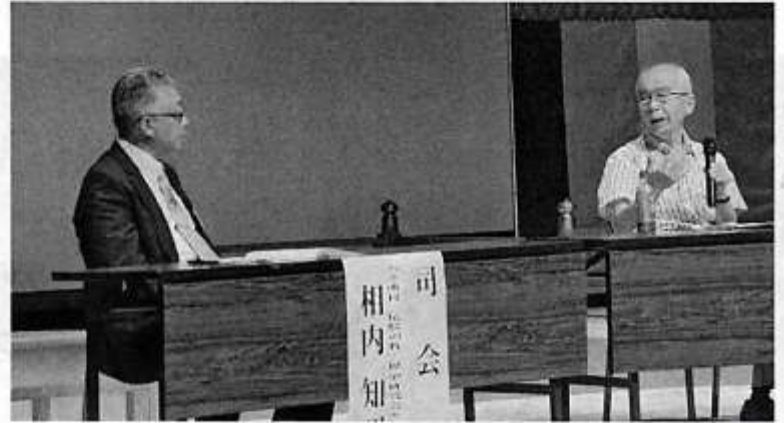


上十三むつ下北

村歴史フォーラム一区切り



入間田宣夫さん(右)と相内知昭会長らによる
パネルディスカッション

「尾駁の駒」テーマ冊子刊行へ

六ヶ所

古歌に詠まれた「おぶちの駒」の産地が六ヶ所村だったかを検証する、

村歴史フォーラムが8月27日、同村のスワニーで開かれた。今回は、2012年のフォーラム開始当初からテーマとしてきた「尾駁の駒・牧の背景

を調べる」のシリーズ最終回。専門家や大学教授が名馬産地の実在の可能性に迫った。

フォーラムは、村「尾駁の駒」歴史研究会(相内知昭会長)の主催。6年にわたり、専門家らが文学や考古学などの分野で持論を展開してきた。今回は、青森県考古学

会副会長の瀬川滋さん、三沢市教委の長尾正義さん、東北大名誉教授で一関市博物館館長の入間田宣夫さんの3人が講演。パネルディスカッションも実施した。

入間田さんは講演で、平安時代の小川原湖周辺の人、物、情報の流れを中心に説明。その上で「尾駁の駒」の存在を明らかにするためには、政治的(軍事的)なルートだけでなく、商人や僧侶によってつくられた物流を明らかにする必要がある」と述べた。

相内会長は6年間を振り返り「実在の可能性はあるという知見は得られた」とし、今後も検証を続けながら村内外に発信していくことを強調した。

フォーラムは今回で一区切りとし、来年以降の実施は未定。同研究会は来年秋ごろをめどに、これまで参加した講師の寄稿を集めた冊子を刊行する予定だ。(桑田友人)

2017年(平成29年)8月20日(日曜日)

インフォメーション

27日、六ヶ所村歴史フォーラム

六ヶ所村「尾駁の駒」歴史研究会(相内知昭会長)は27日、同村のスワニーで「六ヶ所村歴史フォーラム2017」を開催する。今回は12年からのテーマ「尾駁の駒・牧の背景を探る」のシリーズ最終回で、小川原湖周辺での人、物、情報の流れを軸に「尾駁の駒」実在の可能性を探る。

午前10時半開始。青森県考古学会副会長の瀬川滋氏と、三沢市教委の長尾正義氏が基調報告を、東北大名誉教授で一関市博物館館長の入間田宣夫氏が基調講演をそれぞれ行う。

このほか、パネルディスカッションを実施。雅楽演奏や同村泊地区の郷土芸能「泊神楽」も披露される。

入場無料。プログラムなど詳細は同会のホームページ(obufinomaki.com)で確認できる。問い合わせは、相内知昭会長＝電話090(3752)0935＝へ。

「名馬の里」ロマンに迫る

六ヶ所村は平安貴族の歌に詠まれた名馬の産地「尾駁の牧」だった。この説を検証してきた歴史フォーラムが6年目の今年、シリーズ最終回を迎えた。フォーラムは、「尾駁の牧」歴史研究会(相内知昭会長)が各分野の研究者を招き、説を補強する考察を重ねながら、歴史のロマンを追求してきた。来秋には講師たちの論考集を出版する予定で、相内さんは「村民が地域の成り立ちと文化を見つめ直すきっかけになってほしい」と期待を込める。



8月のフォーラムで、「尾駁の牧」について意見を述べ合う相内さん(左)と入間田さん(右)

(加藤景子)

今年のフォーラムは8月末に開催。4時間半に及ぶプログラムで、県内外の聴衆約100人が、東北大名誉教授で一関博物館長を務める入間田宜夫さんの講演などに耳を傾けた。

フォーラムは2012年から6回にわたり、考古学、歴史学、文学の各分野の大学教授や研究者たちが、馬にまつわる歴史、「尾駁の駒」と呼ばれるまだら模様の馬を詠んだ和歌などについて解説。仮説と最新の研究成果との間を埋めるピースを持ち寄ってきた。

駿馬の産地として有名だった陸奥国と、京の都が馬の交易でつながっていたことは文献などから明らかになっている。最大の焦点は、「尾駁」の地名が唯一残る六ヶ所が

交差点

6年目で最終回

六ヶ所「尾駁の牧」歴史フォーラム

「尾駁の牧」だったかどうかだ。

フォーラムや村史の内容を総合すると、平安時代、馬を飼う人々が六ヶ所に移住し集落を形成。同じ頃、京都では後撰和歌集に「尾駁の駒」が初めて詠まれ、それ以降、身分の高い貴族ほどこの題材を好んだ。当時、まだ馬は時の権力者に珍重されていたという。源頼朝が愛用した名馬「いけづき」は「尾駁の牧」から出たと推定する説もある。

今年、フォーラムで本県周辺の人・物・情報の交流ルートについて講演した入間田さんは「このように高いレベルの研究集会が、地元の人々にとって続いてきたことは全国的にも珍しく、これまでの学問のあり方に風穴を開ける快挙」と驚きつつ、「内容も、学会・県史レベルで議論されてきた枠組みを超えるような、新しい問題が取り上げられていく」と惜しみない称賛を送る。

同村の表館遺跡で出土した石帯(平安貴族が身に着けるベルトの装飾品)、野辺地町の二十平遺跡や三沢市の平畑遺跡で見つかった緑釉陶器(緑色の上薬をほどこした陶器)は、中央とのつながりを示す有力な遺物とみられている。

「尾駁の牧」について決定的な証拠はまだないが、「学術成果の積み重ねにより、その可能性について十分な裏付けを得た。何となく類推するだけにどまっていた状態から比べ、飛躍的な前進」と強調した。

相内さんは十数年前から、県内外の図書館で資料を探し、上賀茂神社(京都)とも交流しながら地道に研究を続けてきた。「一番の財産は、興味を持ってくれる研究会の仲間ができたこと。『学問は執念』と激励してくれた先生もいた。批判もあったけれど、『知りたい』という気持ちが強くなってきた」とこ

村文化協会の高田孝徳会長(72)も「村の文化史に一石を投じる取り組み。よくこまできたと思う」と評価、論考集の完成を待ち望む。

フォーラムはこれで一区切りするが、相内さんは来秋の出版に向け、準備に忙しい日々を送る。「先生たちの研究成果を待ち、新たな発見があれば再びフォーラムを開きたい」。相内さんの探求心は尽きない。

フォーラムはこれで一区切りするが、相内さんは来秋の出版に向け、準備に忙しい日々を送る。「先生たちの研究成果を待ち、新たな発見があれば再びフォーラムを開きたい」。相内さんの探求心は尽きない。

「地域見直すきっかけに」